

■平成24年度在京飯田高校同窓会講演から

世界に発信する飯田のまちづくり

飯田市における地域づくり、まちづくりの実践から

桑原利彦(高27回)・酒井郁雄(高27回)

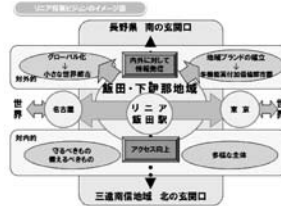
ふるさと飯田下伊那地域の現状について、お話をさせていただきます。飯田地域のいま一番大きな話題は、「リニア中央新幹線」です。飯田下伊那のどこに行ってもリニアの話題が出されます。

リニア中央新幹線は、東京と大阪を1時間余りで結ぶもので、飛行機並みの早さ、地上を時速500kmで走るまさに夢の乗り物です。現在は、東京と名古屋間の2027年開業を目指す工事着手に向けて、JR東海により環境アセスメント調査が進められているところです。

リニアによって時間距離が大き



高速道、鉄道で、南信の玄関口となる飯田



●さかい・いくお

飯田市役所リニア推進対策室長。これまで、市公民館副館長、南信州広域連合事務局広域振興係長など。旧南信濃村役場勤務(平成17年の合併から市役所勤務)プライベートルドで公民館分館長、主事等を経験。



●くわはら・としひこ

市民グループIIDA WAVEヘッドプロデューサー。飯田人形劇フェスタ実行委員会 パーク運営委員長。りんご並木まちづくりネットワーク コーディネーター。SBCラジオ「南信州ハートフルサタデー」パーソナリティー。ライブハウスCANBAS代表

く縮まってくるわけですが、現在飯田からの90分圏域は、名古屋の手前、松本の圏域までとなっています。リニアが開業すると、名古屋から四日市辺り、東京都内にまで

拡がります。東京の側から見ますと、現在飯田までは 4 時間余り。八戸や秋田、広島と変わらない時間距離ですが、これが 40 分余りに短縮されます。東京都心から 45 分圏域を見ますと、八王子や熱海など、この圏域に飯田が入ることになります。

飯田下伊那は、リニア中央新幹線と三遠南信道によって、長野県の南の玄関口となり、浜松を中心とする静岡・遠州地域、豊橋を中心とする愛知・東三河地域と合わせた三遠南信地域からは北の玄関口となり、大きな広域交通の拠点となります。

こうしたプロジェクトにより大きな変化が期待されていますが、ただ待っているだけではその効果も部分的なものになると思います。あるいはストロー現象というようなマイナスの影響も危惧されています。

リニアと三遠南信道の効果を最大限に活かして地域振興を進めるためには、ハード面だけでなく、ソフト面の取り組みが非常に重要だと考えています。それが、飯田で取り組んでいる「地域づくり」「まちづくり」だと考えています。

地域づくり “公民館運動” が重要な役割

公民館というと、一般的に「館」と言う建物としてと

らえますが、飯田では文化を生み出したり楽しんだり、年代を超えて行なうという「活動」そのものと呼んでいます。合併を繰り返してきた飯田市では、合併前の旧村単位 20 地区全てに平等に公民館を設置し、市職員を公民館主事として配置して、民と公が上手に連携し地域活動を支援しています。それぞれの地区公民館は、地域住民が自立した学習活動の場、社会教育機関として、公民館を中心に地域づくりの活動が進められており、自主的な学びの風土が受け継がれています。こうした公民館活動は飯田市に限らず、下伊那の町村全域においても同様にあります。



川路公民館の「里山の学習活動」

ども達に、里山の素晴らしさや地域の良さを伝える「里山の学習活動」を行っています。そうした活動から地域づくりの必要性を子どもたちから学んでいます。また、自治会では担いきれなくなった、世代間交流や男女共同参画なども、若者

や女性の参加も促しながら、期待される地域活動となつて
います。

まちづくりは町内イベントとネットワーキング

かつて、飯田市の中心市街地は、昭和22年に市街地の
大半を消失するというような大火があり、焼け野原に
なつてしまいました。その後、昭和28年に飯田東中の生
徒たちが、自らの手で美しいまちを作ろうと、40本のリ
ンゴの苗木を植えました。この「リンゴ並木」の歴史も、
ちょうど来年60周年を迎えます。リンゴ並木から何がも
たらされたのか。大火を経験し、町中の防火帯とか、防
火の意識づくりにつながるということもありましたが、
今では飯田市民の心のシンボルにもなっています。地域
の誇りでもあり、飯田市全体のまちづくり精神の象徴に
もなっているといえます。

モーターゼーションの進展等に伴って、全国のどこに
もみられる傾向として、飯田市も大型ショッピングセン
ターの展開により郊外へと人の流れが変わり、中心市街
地では賑わいがなくなり、地盤低下が極端に進行してし
まいました。

そこでリンゴ並木を、「歩き、憩いの場」として整備し、
周辺の銀座、本町の再開発を進め、「中心市街地のまちづ

くり」に取り組んでいます。ここでは市民が企画した賑
わいづくりの色々な町中イベントまちなかを実施し、中心市街地
にも、再び人を呼び戻すための取り組みが展開されてい
ます。

「りんご並木まちづくりネットワーク」

街づくりの活動では、個々の団体が「何か」をやるう
とすると、足の引っ張り合いになつてしまう場面も生ま
れてきます。そんな時によく聞かれる言葉は「俺は聞いて
ないぞ!」というフレーズです。これを無くし、お互
いに計画を報告するだけで改善されるのでは、という発
想で生まれたのがこのネットワークです。

あくまで「お互いに報
告をし合う場」というた
けで、「集団の一つの団
体では無い」ということ
にこだわっています。そ
の為に代表という役を持
たず、調整役としての
コーディネーターがいま
す。

町中イベント
「報告するだけ」の意





フランスの飯田通り

今年の人形劇フェスタは、8月の2日から5日の4日間開催されましたが、このフェスタ開催につながったものが、黒田人形、今田人形という人形浄瑠璃の文化の伝承ではないでしょうか。今も地域の皆さんによる保存伝承活動により、貴重な

市民が復活させた世界に発信する 『いいだ人形劇フェスタ』

味は大きく、皆が一度でも顔を見たり話をするだけでも大きな収穫があります。その結果、年代や立場を超えて協力ができることが多くなりました。
現在では、「りんご並木まちづくりネットワーク」主催でのイベントも多くなり、意図せずにひとつの団体的な役割すら果たすようになってきています。単純なようですが、実は画期的なものとして注目されています。自主性は持ちながらも、ここにも行政などからの強力なバックアップはいただいています。

民俗芸能が受け継がれています。

人形劇フェスタは、前身の「人形劇カーニバル」を含めて、今年で34回の歴史があり定着しているイベントです。さまざまな形で市民ボランティアが関わり、市民が創り上げるイベントになっています。現在では、国の内外から人形劇団が集まり、市内から市外までを含め、約120カ所の会場で、400ステージを超えるような公演が繰り広げられ、日本一の大きな人形劇イベントになっています。また、市内の地区公民館を会場とし、人形劇の劇団員と地域の皆さんの交流を図り、受付は中学生や高校生のボランティアの子ども達が務め、イベントを運営する例もあります。

このように人形劇フェスタは、市民と劇団員が共に創り上げる人形劇の祭典となっています。そして誰でも参加できる、「見る」、演じる、支える、わたしがつくるトライアングルステージ」を基本的な考え方としていきます。こうした取り組みが、これからの飯田のまちづくりにつながっていくシンボルだと考えています。

外国の皆さまとの交流の場という面もあります。アメリカのミズーリ大学の学生たちがホームステイしながら、毎年來飯しています。日本の生活文化を学ぶことを目的に、約6週間にわたって今田人形座で人形浄瑠璃を

研修し、最後には人形劇フェスタのステージでも発表しています。さらに一般家庭に滞在中には、市民の皆さんを講師にして、弓道、剣道、お茶、お花などを体験したり、高校生との英会話など、飯田の生活文化を体感しながら草の根の交流をしています。

人形劇の交流を通じて、外国に進出する飯田をご存知でしょうか？ フランスの「飯田通り」です。シャルヴィル・メジエールの市内に昨年誕生しました。1988年から人形劇を通じた友好関係が縁で実現したものです。また、「人形劇の友 友好都市国際協会」という団体にも加盟し、世界の13カ国と16の都市・地域との交流を進めています。日本での加盟は飯田だけとなっています。

前市長の判断で一旦幕を閉じた「人形劇カーニバル飯田」を、これを市民の手で新たに「いい大人形劇フェスタ」として復活しました。国際的な活動を繰り広げる日本ウニマ（国際人形劇連盟日本センター）の会長である小椋田美子氏は「飯田の人たちはあまり実感していないように見えますが、飯田市のフェスタは実は多くの国から大きな評価を受けています。間違いなく世界的と言える人形劇の祭典です！」と評価してくださっています。



街角コンサート

街角コンサート

市民自主運営による 「伊那谷文化芸術祭」

かつて開催していた飯田市民音楽祭から発展したもので、今では75団体、2千名近く参加者がいるという飯田下伊那では最大となる音楽イベントです。

大きな特徴は市民による自主運営（もちろん行政もバックアップ）であり出演者が裏方も務め、皆で作り上げる芸術祭となっています。通称オケ友と呼ばれるこの音楽祭は、プロのオーケストラメンバーのための講習会とコンサートを、20年間にわたって開催してきた「ファイニス夏の音楽祭」が終了したことから、その後、関わっていたクラシック愛好家の市民たちが実行委員会を立ち上げて始めたものです。「ファイニス」での飯田市とプロのオーケストラとのお付き合いを元に、市民の自主的な企画と運営によって行なわれています。これもまた飯田市の一大イベントです。毎年5月の連休の飯田市は「クラシックの街」となるのです。

自由気ままな市民活動 “IIDA WAVE”

なにかを行なおうと考えた時に、場（全体の枠組みと会場など）を作る者と、中身（音楽など）を作る者が必要……です。ならば「最初から合体してしまえばいいのではないか」ということで設立されたのがこの団体です。「楽しいことしかやりません!」「文化と街づくりを楽しむ!」という合言葉の下に、2百人前後の会員が自由気ままに「音楽」「映画」「走る」「歩く」「自転車」「野菜・農業」などの分野で集まり楽しんでいきます。この自由気ままな市民団体を支えているのが、「まちづくり」のためにできた法人「飯田まちづくりカンパニー」や行政で



IIDA WAVE

あり、まさに官民の理想的な関係がここにはあります。文化というものを通じて年齢、性別、国籍の区別なく、感動を共有するということだけにとだわった（それゆえに失敗ということがない）市民団体とそれをサポートする公的な組織という形

は、全国でも新しい形として注目されています。設立されてからすでに14年が経過しようとしています。

飯田市の特徴——官民の理想的な関係

他の地域に比べて共通するのは皆が「平場」であること、官と民が理想的な関係にあるということです。市民が平等で物事に自発的に取り組み、できない部分を官がしっかりと補う、という仕組みが様々なところで見られます。飯田市はまさに新しいまちづくりの形として大きな注目を集めているのです。もちろん問題点はまだまだ色々あるでしょうが、新しいモデル、飯田市ができてつあるのを感じています。



飯田市

受け渡しの時代

生徒集会やデイベート大会を自主的に開くなど、最近の高校生には新しい動きを感じます。かつて部員が10人程度だったフォーク系の音楽部であるギター班は、今や50人近くの大所帯となりま



今後の飯田・下伊那の進むべき地域づくりの方向を語る

ていく受け渡ししの時代を迎えているのかなとも感じています。

おわりに

全国的に元気をなくした街が増えてきました。「幸せを感じられた良き時代を取り戻したい!」「あの時の中心市街地のような活気をもう一度!」という声がよく聞かれます。「オールウェイズ・三丁目の夕日」という映画が大ヒットしました。しかし活気があったと言われる

時代は、実は今よりずっと貧困であったはずなのに、なぜ「あの頃は良かった」と言うのでしょうか? 単なるノスタルジーなのでしょうか?

日本より経済的には低い発展途上国の人びとのほうが、幸せ感に溢れている人が多いとも耳にします。この幸せ感を取り戻すことが、新しいまちづくりに求められているのではないのでしょうか。そのためには皆が「それぞれの価値観を持ち、お互いに認め合いながら、繋がっていくこと」が大切だと強く感じています。

飯田下伊那はそんな幸せを生み出すモデル地域として、若者たちと一緒に学んでいければと思っています。取り残された孤島ガラパゴス島のようにであったがゆえに、いまだ多くの人たちから注目されている飯田下伊那ですが、だんだんと開発の波にさらされていくとすれば、中途半端な都会化となるでしょう。十数年後にリニア時代がやってきます。

いま、注目されていることを間違うことなく大切に育てることで、世界から最も近い「心ある素晴らしい田舎」になれるような気がします。

皆さんにも、これからの飯田下伊那に注目していただき、そして関わってもらえることがあればと……。是非お願いしたいと思います。